

幼児のボール転がしに関する実践研究  
— 潜在能力の顕在化を意識したアプローチ —

新戸 信之

Practical Research on Ball Rolling Activity for Toddlers  
— These method of the ways Approaches to unlock potential skills —

Nobuyuki Shindo

キーワード：幼児、発達差、運動遊び、固有感覚、指導ことば、運動イメージ

Key Words : toddler, developmental difference, physical-motor-play, proprioception, instructional words, motor imagery

**要旨**：子どもの遊ぶ機会が減少し、近年では伝承遊びや運動遊びなど、遊びをテーマとした様々なイベントや教室、ワークショップなどが開催されている。しかしながら、大人主導で計画された「遊び」には、必然的に子どもならではの自由な発想に基づく運動が含まれることは少ないと考えられる。今回の活動のねらいは、子ども達の自由遊びを観察している中で見かけた、日常生活や特定のスポーツではあまり行われな運動をすることにより、子どもの固有感覚を育てることであり、研究の目的は潜在能力を顕在化させるためのアプローチを検討することである。

活動の結果、発育・発達の観点から見るとできるはずの運動を思う様にできない子どもに対し、指導者がタイミング良く、既にできる運動を言葉により表現することで、コツを掴むことができることがわかった。

## 1. はじめに

子どもの体力や運動能力の低下が指摘され、問題視されてから久しい。その要因の一つとして、子どもたちが遊ぶために必要な「時間」「空間」「仲間」が失われているという指摘がある<sup>1)</sup>。複合的な要因により遊ぶ機会が減っている現代の子どもにとって、幼稚園や保育所等の保育機関において運動遊びなどにより身体を動かすことは、子どもの健全な発育・発達を促す上で欠くことのできない活動と言えよう。

幼少期に多様な運動を経験することの重要性については、既に多くの報告がなされている<sup>2)</sup><sup>3)</sup>。そのような中、幼児を対象とした伝承遊びや運動遊び、あるいは遊びをテーマとした様々なイベントや教室、ワークショップなど、大人主導で計画された様々なプログラムが見受けられるが、筆者が幼児教育現場で見ると限りにおいて、子どもたちが大人には想像もできないような動きをして、その動きを面白がって継続したり、他の子どもと共有したりするのは、そのほとんどがプログラム間の休憩時間も含め、自由遊びの時間である。

特定の運動の繰り返しからは得ることのできない、謂わば「無段階の固有感覚<sup>4)</sup>」を得るためには、形式にとらわれることのない運動も必要であると考えられる。また、動きの多様性をより高め、運動を継続させるためには、子どもの自由意思に基づく活動の中で偶発的に生み出された運動が、「思うようにできないおもしろさ」や「上手くできた時の嬉しさ」などの内発的な動機づけにより遊びとして行われることが理想であろう<sup>5)</sup>。

しかしながら、時間的、空間的に制約がある中、偶発的な動きを待つことは現実的ではない。また、「上手くできた時の嬉しさ」を得るためには、運動経験により得られる経験知を蓄積し、「勘」や「コツ」を掴むことが必要となるが、日常的に運動をする習慣がない子どもには身体活動に対して消極的な傾向が見られることから<sup>6)</sup>、自由時間での活動を通して身体的な経験知を蓄積することは困難だと考えられる。

そこで本研究では、子どもの固有感覚の育成をねらいとして、子ども達の自由遊びを観察している中で見かけた、日常生活や特定のスポーツにおいて行われることの少ない運動を抽出して活動に取り入れた。今回は2歳半～3歳児のボール転がしの際の動きに着目し、運動のモチベーションを維持するためにリレー形式で行った。その際に年上の子どもを模倣できるよう、2歳半から6歳までの子どもたちが一緒に活動することとした。また、うまくできない子どもに対しては、指導者が行うような方法ではなく、幼児から小学校高学年までが混在する異年齢集団において、小学生が幼児に教える程度のアドバイスや声掛けを行い、その効果について検討した。

## 2. 方法

### 2-1. 対象

幼稚園型幼児教育施設の在園児（2歳6か月～3歳※以下「年少々」、3歳児※以下「年少」、4歳児※以下「年中」、5歳児※以下「年長」）のうち、当日登園した年少々6名（男3名、女3名）、年少9名（男3名、女6名）、年中8名（男5名、女3名）、年長3名（男1名、女2名）の合計26名。

### 2-2. 実施時期・方法

実施日時：平成30年10月29日（月）午前10時50分～11時25分

本活動は、週に1回実施している「専科『体育』」（※以下「体育」と表記）の時間に担当教師（筆者）により実施した。

当該園の保育時間は午前 9 時 20 分から午後 2 時までであり、担当教師は「体育」の時間以外は日常の保育活動をしている園児とフリーの立場で接しているため、活動時に園児が過度な緊張感や高揚感を持つことはない。また、担当教師は全ての子どもについて、日常における様子や性格、運動能力を把握している。

### 2-3. 実施場所

施設近隣公園の自由広場

### 2-4. 用具

「体育」において使用している、ウレタン性のボール(直径約 25cm)、スタートライン用の縄(緑色)、折り返しを示すマーカーコーン(オレンジ色)を使用した。

### 2-5. 手続き

①スタートラインとして設置したロープから 5m 離れた地点に、両チームの列の直線上に折り返し点を示すマーカーコーンを設置。

②各年齢の子どもが均等になるように、2チームに分ける。

③スタートラインの前に、2メートルの間隔を空けて両チームを 1 列に並ばせる。その際の順番は子ども達の話し合いにより決める。

④「ボールころがしリレー」の説明をする。

⑤ホイッスルの合図でスタート。

※上手くできない子どもに対しては、当人にとって理解しやすいと思われる動作や言葉により“コツ”を教える。

⑥全員が走り終えたら終了。

※レースは2回実施した

※担当教師の他に常勤教員3名が公園に同行し、レース中の各チームの統制と安全確保の役割を担った。その際技術に関する助言や手伝いは一切しなかった。

### 2-6. 「ボール転がしリレー」の方法

①先頭の走者はホイッスルの合図によりスタート。

②ボールを手で転がしながら走り、折り返し点のマーカーコーンを回ってスタート位置に戻り、ボールを次の走者に渡す。

③以降②を繰り返し、最終走者が先にスタート地点に戻ったチームの勝利。

### 2-7. 分析方法

担当教師は指導を行っていたため、ウェアラブルカメラ 2 台を使用して撮影した。1 台を全体が写る位置に固定し、1 台を担当教師の胸の中央付近に装着した。活動終了後に担当教師と 3 人の常勤教師により、活動中の様子について意見交換がなされた。その後、担当教師が映像を分析することにより、言葉がけの効果について検証した。

### 3. 結果

技術やスピードの差は見られるものの、年長児、年中児、年少児は全ての子どもが、足を一歩踏み出すたびにボールに一回触れて、ボールを軽く押し出しながら速やかに進んでいた。それに対して年少々児は、全ての子どもがボールから手を離すことなく、両手で同時に、あるいは両手を交互に動かしながらボールを回転させて前に進んでいた(図-1)。進む速度が遅く、時間がかかったことから、子どもの心身の負担を考慮し、年少々児が走者になった際には折り返し点のマーカークーンを概ね 2m 程近くした。その際、年少々児以外の子どもから不満の声は聞かれなかった。



図-1. 年少女児(左)と年少々女児(右)

活動中の年少、年中、年長の子どもは、イキイキとした表情で、走者以外の子どもも応援したり、大声で感情を表現したりしていた。一方、年少々の子どもは、順番を待つ間はリラックスした表情で地面に絵を描いたり周囲を見たりするなど、普段の活動時と同様の行動をしていたが、順番が回ってくると真剣な表情でボールを転がしていた。

年少々児は、年長児や年中児が走者となり、ボールを上手に転がすのを見ていたが、その方法を真似ることはなく、また、年少々児が競技中に年長児や年中児の子どもに追い抜かれたりすれ違ったりしても、その方法を真似ることはなかった。

活動中の年少、年中、年長の子どもは、イキイキとした表情で、走者以外の子どもも



図-2. ボールを転がした年少々女児

2回目のレースを行う前に、(年少々児の動作を再現しながら)「年少々さんはこうやってボールを回していたけど、(年長者の動作を再現しながら)こうやって、進んだ方が早く進めるね。」と目標動作を提示したところ、全ての子どもが注視したが、2回目のレースにおいても、全ての年少々の子どもが1回目同様にボールを直接手で回しながら進んだ。

そこで、年少々児が走者となった時には、一人一人に「コロコロ～ってしよう」と声を掛けたが、変化は認められなかった。次に少し間において「前に押ししてみよう」

と声をかけたところ、1人の年少々女児が両手で回していたボールを放り出すようにして前方に転がした(図-2)。間髪を入れず、「そうそう、上手!」と言葉がけをしたところ、笑顔になった。その後その動作を2回繰り返し、次の走者にボールを渡した。

以上のことから、子どもが運動イメージ<sup>7)</sup>を想起しやすい表現での言葉がけに一定の効果があることがわかった。

#### 4. 考察

1回目のレースにおいて、ボールを速やかに転がすことができた年少々児が0人だったのに対して、年少、年中、年長の子どもは全員ができた。

本研究における活動以前にも、「体育」の中で、ボールを用いた活動をしているが、手でボールを転がしながら前に進むという運動をしたことはない。また、「体育」は午前と午後に分けて行うこともあるが、その際には「年長・年中」のグループと「年少・年少々」のグループに分かれるため、年少の子どもと年少々の子どもが「体育」の時間内において異なる活動をしたことはない。以上の点から上手くできない理由として年齢による発達差も要因の1つであると考えられるが、「前に押ししてみよう」という言葉がけにより出来るようになったことから、経験知の不足による影響が大きいと考えられる。すなわち、「前に押し」という動作は既知であったと考えられるが、提示した目標動作と、「コロコロ～ってしよう」という言葉については、両者とも動作自体ではなく動作の結果を表しているため、当該の結果に繋がる動きをイメージすることができず、顕在化できなかったということであろう。この結果は吉川<sup>8)</sup>による擬音語および擬態語を用いた指導ことばに関する先行研究において、「教師及び大学生と児童・生徒との差異は、運動経験や指導経験による運動構造や運動感覚の把握の程度の差に起因するものと考えられ、擬音語・擬態語に対する運動イメージに運動経験が大きく影響することが示唆された。」とする報告を支持するものである。

活動中の子ども達の様子は、年少、年中、年長の子どもは、相手チームとの競争を意識して速く進むことや上手に転がす事を楽しんでいる様に見えた。一方、年少々の子どもは、真剣な表情でボールを転がしており、何らかの動機づけにより、夢中になっている様ではあったが、楽しんでいる様には見えなかった。他方、言葉がけによりボールを前に放り出すことができた時の女児の表情は、できた事に対する喜びや、転がるボールに対する面白さ、ボールを追いかける楽しさに基づくものであると考えられる。それらの感情は、いずれもボール遊びや運動遊びの動機づけになり得るものであることから、今回試みた方法が有効である可能性が示唆された。

今回のアプローチにより、目標動作に導くことができたのは1名であったが、一人ひとりの子どもについて、日常生活における目標動作に近い動作の獲得状況を把握することにより、よりの確なアプローチが可能になると考えられる。できなかったことができるようになるということは、年齢や性別に関わらず誰にとっても嬉しいことであり、その嬉しさが動機づけとなり、新たな挑戦へと繋がる。反対に、いくら努力を重ねても思うようにできなければ、努力をやめてしまうことに繋がる。従って、指導者は子ども達が少しでも上手くできるように工夫を重ねる必要がある。

#### 5. まとめ

サンプル数が少ないため断定することはできないが、手でボールを転がしながら前に進むという動作は、年齢による影響を受けている可能性があるものと考えられる。しかしながら、今回、声掛けにより転がすことができた女児のように、指導者がタイミング良く個々の特性や性格にあった言葉がけなどのアプローチをすることにより、潜在運動能力を顕在化することが可能であることがわかった。

## 6. 文献

- 1) 文部科学省：3 子どもの体力の低下の原因、2002、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/singi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/singi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm)、2019年10月30日アクセス
- 2) 日本発育発達学会 編 (2014) 幼児期運動指針実践 ガイド, 杏林書院, pp1-9.
- 3) 日本学術会議 健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会 (2017) 「提言 子どもの動きの健全な育成をめざして～基本的動作が危ない～」
- 4) 末廣健児・後藤 淳、感覚入力・感覚受容とそれに伴う運動の変化について、関西理学 11、pp. 21-24、2011
- 5) 陳 惠貞、幼児の内発的動機づけを育てる-保育者の関わり方への提案-、子ども学研究論集 4、pp. 57-67、2012、名古屋産業大学・名古屋経営短期大学リポジトリ、[https://meisandai.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=88&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://meisandai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=88&item_no=1&page_id=13&block_id=21)、2019年10月30日アクセス
- 6) 新戸信之、保育園児の保育中の心拍数について、日本幼少児健康教育学会第36回大会【秋季:新潟大会】抄録集、2017
- 7) 水口暢章・彼 末 一 之、運動イメージと運動パフォーマンス、計測と制御 56 (8)、pp. 568-572、2017
- 8) 松下健二・藤田定彦、運動を指導する際の擬音語・擬態語に関する基礎的研究、兵庫教育大学教科教育学会紀要、11、pp. 11-30、1998